

社会科地図帳中国地名カタカナ現地音表記とその基準について

——漢字制限論の残したもの

明木茂夫

1

このたび福嶋亮大氏・池田巧氏が「中国語音節表記ガイドライン」を作成された。私も基本的に両氏のお考えに賛同するものである。一方私は偶然、特に学校の社会科地図帳の中国地名カタカナ現地音式表記について、両氏とは異なる角度から考察を行ってきた。詳細については拙論『地図帳の怪(1)』(4)〔中京大学「国際教養学部論叢」「文化科学研究」所載〕、『地図帳中国地名カタカナ現地音表記の怪——「大運河」が「ター運河」とはこれいかに』(同人誌)、『社会科地図帳のカタカナ中国地名について——黄河文明はホワンホー文明?』(と学会「トンデモ本の大世界」所収、アスペクト刊)など

をご参照いただきたい。ここでは、私なりの角度から両氏のガイドラインに援護射撃を行いたいと思う。

福嶋氏はこの問題についてツイッター上で発言を行っておられ、そこに次のような感想が寄せられているのを見かけた。

(前略) 中国語のカタカナ表記については辞書や入門書でもまちまちで、ほんと困ってたので助かります。てっきりJISとかで官製のガイドラインがあるものと思って探したんですけど、ないんですね。(後略)

いやいや、実はあるんですよ。国語審議

会と文部省お墨付きの中国語カタカナ一覧表が。しかしネット上でもほとんど見ることができず、これを掲載する書籍もほとんどなく、現在その閲覧が必ずしも容易ではないなどと、基準として機能しているとは言い難いが……。意外と古い時代に作られたもので、いくつかのバージョンが存在し、しかもその地名・人名への運用に関していろいろ制限があるなど、少々分かりにくい点もある。ではそれを過去のものとして無視できるかと言うと、決してそうではない。現在学校で使われている社会科地図帳は、明らかにこれらの表記の基準によって作られているのである。

ではそうした「官製」の表記基準について簡単に整理してみよう。歴代以下のようなものが公表されている。

A、文部省教科書局調査課国語調査室「外国の地名・人名の書き方(案)」(昭和二十一年。表記統一の方針を示したものと)
 B、国語審議会「中国地名・人名の書き方の表」(昭和二十四年。文化庁ウェブサイトで閲覧可能)

C、国語審議会「中国地名・人名の書き方の表(便覧)」(昭和二十五年。文部省調査普及局国語科がBを増補したもの)
 D、文部省「地名の呼び方と書き方(社会科手びき書)」(昭和三四年。Cを節録した「中国標準音の書き方」を収録)

E、出版社による冊子(昭和三三―三四年。全国教育図書・日本書院第一法規出版等。Dに解説を加え、学校等に配布したもの)
 F、教科書研究センター「地名表記の手引」(昭和五三年、ぎょうせい)
 G、教科書研究センター「新 地名表記の手引」(平成六年、ぎょうせい)

特に重要なのがDの文部省「地名の呼び方と書き方(社会科手びき書)」であり、爾後社会科地図帳はこの方針に従って作成されるようになる。後に手引き書の作成・発行が(財)教科書研究センターに移り、昭和五三年に「地名表記の手引」、平成六年にその改訂版が出版され、今日に至る。以下、このカタカナ表記を仮に「文部省式」と呼ぶことにしよう。

これらを通覧して私が最初に驚いたのが、BやCの冒頭にある次の規定である。

中国の地名・人名は、かな書きにする。中国の地名・人名のかな書きは、原則として現代の中国標準音による。

この表の実施にあたっては、当分の間、漢字をあわせ示しても差し支えない。(傍線明木)

そうなのだ。国語審議会が意図したのは、中国地名は西洋地名同様にカタカナのみで表記する、漢字は使わない、ということだったのである。漢字で書いて、その中国語読みをカタカナで添える、ということではなかったのだ。昭和二十四年の「外

興膳 宏著 合璧詩品書品

カテゴリーを異にするかにもえる詩論と書論は、一つの根源から出ているという発想から、ともに九段階評価法をとる鍾磔『詩品』と庾肩吾『書品』を通底させようという試み。 7875円

▼興膳 宏著 10500円
乱世を生きる詩人たち 六朝詩人論

孔祥吉・村田雄二郎著 清末中国と日本

宮廷・変法・革命
辛亥革命前後の十年間に生じた日中関係史上の十二の重要テーマを抽出し、原資料の博覧・考察により独自の解釈を提示する。 7140円

▼村田雄二郎編 7875円
『婦女雜誌』からみる近代中国女性

有澤晶子著 比較文学

比較を生きた時代 日本・中国
並行・解釈による比較、類型化して比較する、異文化体験、絵画空間の認識など十三のテーマを設定し、日本と中国それぞれの文化理解や葛藤を通じて、さまざまな比較の事象の範例を追究する。テキストにも最適

並製2940円 特装版4725円

研文出版

東京・神田神保町2 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

国(中国)の地名・人名の書き方に関する
主査委員会」で、当時の国語審議会会長
安藤正次が「むずかしい漢字をへらすの
が、漢字制限である」と発言しているこ
とからも明らかのように、これは当時の
漢字廃止論・漢字制限論と連動したもの
だったのであろう。現在の地図が、

石家莊
でも

石家莊(シーチアチヨワン)

でもなく、

シーチアチヨワン(石家莊)

となつているのも、この方針を具現化し
たものだと考えられる。つまりあくまで
カタカナが本体で、お情けでカッコ内に
小さく添えてある漢字は所詮「当分の間」
のもの、ということなのだ。

近年、漢字を添えずにカタカナだけ、
ということが増えてきているように感じ
る。一部の公務員採用試験は漢字無しの
カタカナだし、何とセンター入試の地理
の設問でも、少なくとも地図の上では中
国地名が漢字無しのカタカナのみで記さ
れている。

「最初に地図を見たらカタカナだけで書
いてあってびっくりしたが、後の方の本
文を探したらカッコ入りで漢字が書いて
あったのでほっとした」

というのは、私の学生の証言である。い
たずらに受験生を惑わせる設問だとは言
えないか。

また教育実習から帰ってきた学生が、
これからはカタカナで教えるように、だ
から世界四大文明の黄河文明は「ホワン
ホー文明」です、と指導を受けたと話し
てくれた。は？それ本気か？それに最
近は黄河文明という言い方はあまりしな
くなつていると聞いたのだが……。

他にも、歴史のテストで「リヤオトン
半島」と書いたら×だった、「リヤオト
ン半島」が正解だった、と話してくれた
学生がいる。そりゃ無茶だよ……。しかも、
近年の地図帳は「リア、オトン」に改訂さ
れているのでまた話がややこしい。私は
上京するたび教科書図書館に通つて歴代
各社の地図帳を片端からチェックしてい
るところなのだが、地図帳にはこのテの
どうでもよさそうな細かい表記の変更が、

実にしばしば行われている。しかも、単
なるミスではなく、それぞれ理由があつ
て変更されている場合もあつて、地図帳
というのはその時その時の事情で常に改
訂を繰り返す、永遠に決定版に至らない
生き物なのではないかと邪推もしたくな
る。そもそも「ワンリー長城」「ター運河」
「ホワイ川」「タイ湖」「タイ山」というの
は実にクセのある表記なのであつて、そ
れを地図帳の標準にしてしまつてよいも
のなのか、暗澹たる思いがする。

3

さて、現在の地図帳の基準となつてい
る文部省式カタカナを、福嶋氏・池田氏
のガイドラインと比べてみると、その方
針に根本的な違いがあることは明らかで
ある。漢字は使わず、カタカナ書きを正
規の表記とする、ということと、中国語
の発音を示したい場合にはこのカタカナ
を標準としよう、ということは、そもそ
も次元の違う話だ。

それ以外に、具体的な表記法にも違い
がある。一番大きいのは有気音・無気音

を区別しないなど、文部省式だと異なる音節に同じカタカナが当てられることが多くなる点だ。例えば文部省式だと、

jī, qī, zhī, chī はすべて「チー」

となるのに対して、(β)「語学教育向け表記ガイドライン」では

チー、ジイ、チイ

チー、チー、チー

と異なるカタカナを当てている。これは中国語を知らない人がカタカナから一対一でピンインにたどり着き、それを手がかりに辞書を引ける可能性を残すという点では、合理的なものだと言える。一対多対応となる文部省式ではまず不可能なことだ。

地図帳中国地名関連の文献を読んでいると、明らかに中国語を知らない人が適当にローマ字を読んだだけという誤りを見出すことがある。他にも、当時大まじめだったカタカナ推進の人達が実にぶっ飛んだことをいろいろおっしゃっていて、私は何度も爆笑させてもらった。また「敦煌」が「トンホワン」だったり「ツンホワン」だったりするのも、表記の方

式に雑多な要素が入り込んだ結果だ。表記のシステムとして見れば、文部省式よりもこのガイドラインの方が格段に優れたものだと言えよう。

もしも今後、マスコミ各社が中国語の表記にこのガイドラインを使用するようになれば、従来散見した矛盾はかなり解消できることであろう。これについて一つ考えていることがある。「ウィキペディア」の中国地名表記である。良い悪いは別にして、現在何かと言うと広く参照されるこのフリー百科事典だが、中国の地名の項目には「カタカナ転記」の項目があつたりなかったり、あつても同じ音節に対するカタカナがばらばらだったりしている。例えば、

広州市「ゲアンヂョウシ」

広東省「グワンドンシヨウ」

広西「コワンシ」

と、同じ「広」に対して「ゲアン」「グワン」「コワン」があるのだ(二〇一一年六月一四日現在)。自由に書き込めるオンライン辞書ではやむを得ない面があるが、今後はこのガイドラインに従うよう何ら

かの形で呼びかける、といったことができないものだろうか。

そうそう、ネットと言えば、中国語を知らない人がカタカナ書きの地名からそれがどこのことをかを検索できるように、少なくとも地図帳に載っている地名についてはすべて、文部省式カタカナ表記と、ピンインローマ字と、日本の常用字体と、簡体字と繁体字とを併記した一覧表を作ろうと計画している。そして、福島・池田両氏のガイドラインによるカタカナ表記も加えて、これを例えば本学サイトにも掲載しておけば、カタカナ地名から漢字やローマ字がネット上で検索できるはずである。「リャ、オトン」「リヤ、オトン」「リア、オトン」などのバリエーションも加えておくなら、さらによい。まあ作るの大変だけど……。逆にカタカナ化推進に悪用されたりして……。

4

さて、もしもマスコミや「ウィキペディア」の表記がこのガイドラインに沿うことになった場合も、なおも残る問題

がある。みなさんもうお気づきだろうか。教科書や地図帳である。文部省式のカタカナは、監督官庁による官製の基準なのである。教科書や地図帳がこれ以外のガイドラインに従うことはあり得ない。すると、殊に地名に関する限りは、地図帳と地図帳以外で世間に常に二種類の表記が併存する、という状況をまねく恐れも捨てきれない。百歩譲ってカタカナ書きしなければならぬとしても、仮にこの文部省式が当初から広く公開され、世間に受け入れられていけば、まだしも無用の混乱は避けられたのかもしれない。しかしその基準の存在は忘れられた。そしてそれが「漢字は添えず、カタカナのみ」を意図していたことも忘れられた。後に残ったのは、不統一で不正確なカタカナ主義だけだったのかもしれない。

これは学生が教えてくれたのだが、ツイッターにこんな発言があったそうだ。

『地図帳中国地名カタカナ現地音表記の怪』（明木茂夫）を斜め読み。地名、人名の読み方は、合理性よりも感情が

かなり関わっているとされる。だから、たまに感情的になって、噛みついてくる人もいるのだ。

おやおや。私は感情的になっっているんだそう。確かに、試験にこんなカタカナを出題することに私は腹を立てていますよ。しかしそこには私なりの根拠があるのだが……。またある会合で、

「現地の人達の読むとおりに書かないと失礼だ。中国語の教師のくせにそんなことも知らんのか。これからは『ベキン』ではなく『ペヤング』と言わねばならぬのだ」

と叱られたこともある。あらあら。この方「ペヤング」が「北京」の現地音読みだと思っておられたようなのだ。そりゃソース焼きそばでしょ？とツツコミを入れるのも憚られる剣幕であった。このように、カタカナ信奉者のみなさんの中には、カタカナ書きに少しでも疑問を呈するとたちまち攻撃的になる人がいて、正直怖い。

いや、中国語ではこんな風に住んで

とカタカナで示すことを、私は決して全否定してはいないのである。必要に応じて使えば、それなりに便利なものだ。しかしカタカナのみを「正しい」ものとするとか、カタカナで書きさえすればそれが不正確でも構わないとか、そうなる話は別だと申し上げているのである。

その意味で、福岡・池田両氏のガイドラインが担う役割と、世間に投げかけた問題提起は大きい。作成者の意図に沿う形で広く普及することを願う次第である。

（あけぎ・しげお 中京大学）

シリーズ現代中国語のカタカナ発音表記をめぐって」では、「中国語音節表記ガイドライン」「平凡社版」（二〇一一年八月）<http://www.heibonsha.co.jp/rd/>をふまえて、今後の課題や関連する問題についてご寄稿いただいております。

